［別紙２］

審査の結果の要旨

氏　名　　遠　藤　晶　子

本研究は、虚血性心疾患患者の配偶者に対する健康教育の必要性と有効性を明らかにする目的で、1.虚血性心疾患男性患者と妻の生活習慣と冠危険因子の類似性、2.虚血性心疾患患者の妻に対する患者入院中の健康教育の効果を検討し、以下の結果を得ている。

虚血性心疾患男性患者とその妻の生活習慣と冠危険因子の類似性については、

1.　夫婦間にBMI、食習慣全般、運動習慣の相関が認められた。

2.　妻が肥満である場合に患者も肥満である相対危険度は、妻が肥満でない場合と比較し、2.23倍(95%信頼区間　1.13-4.38)と有意に高かった。

3.　妻が喫煙者である場合に患者も喫煙者である相対危険度は、妻が喫煙していない場合と比較し、2.23倍(95%信頼区間 1.19-4.16)と有意に高かった。

これらの知見は本対象の男女を無作為に組み合わせた「ランダムペア」では認められず、真のペア、即ち夫婦にのみ認められた。これより、本研究においては、夫婦であるがゆえに肥満・肥満度と生活習慣が類似していることが示された。

虚血性心疾患男性患者の妻に対する患者入院中の健康教育の効果については、

4. 生活習慣に関して、介入群では患者の総エネルギー摂取量と脂質摂取量、妻の食物繊維摂取量と過去一ヶ月間の受動喫煙者割合の有意な改善が認められたのに対し、患者の個別健康教育を主体とした対照群ではこれらの指標に有意な変化が見られなかった。しかし、これらの評価指標における介入前後の前後差について両群を比較したところ有意差は認められなかった。

5. 心理社会的因子に関して、介入群では、SF-36におけるGeneral healthとVitality以外の全ての下位尺度が有意に改善した。さらに、介入群は対照群と比較し、患者のSocial functioning、Mental healthにおける得点の改善が有意に大きかったが、ベースライン値と影響因子の調整後有意ではなくなった。また妻の場合には、介入群のBodily painに有意な改善が認められたが、有意な群間

差は認められなかった。

6.　介入群の妻の 73.7%が家族に対する健康教育があった方が良いと回答し、その対象者として 92.9%の者が患者の配偶者を、39.3%が子供を挙げていた。

従って、本研究においては、患者の妻に対する健康教育について、その実施を望む者が多かったが、明らかな介入効果は認められなかった。

以上より、本論文は、虚血性心疾患患者に対する効果的・効率的な健康教育手法の開発に向け、患者のみならず、妻を教育対象として捉え評価した点で独創的である。さらに、臨床現場での実用性を考慮した研究設計と、妻に対する健康教育の必要性を示した結果は、臨床現場での健康教育の改善に貢献するものである。これより、学位の授与に値するものであると考えられる。